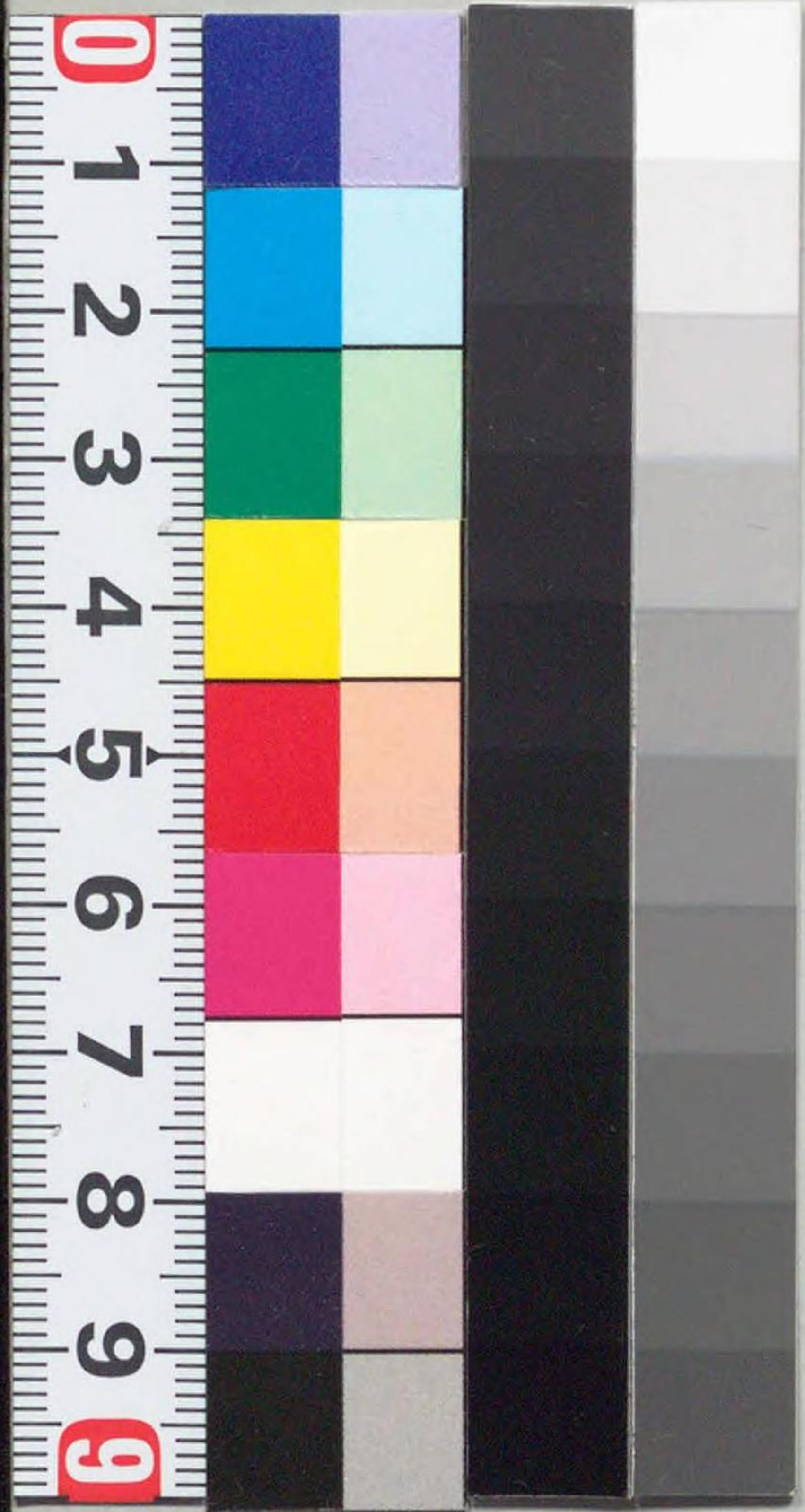




911.168
Sa266s3



00255658



911.168
Sa266s3



歌集
霜

齋藤茂吉著

〔アララギ叢書第百五十篇〕

岩波書店刊行

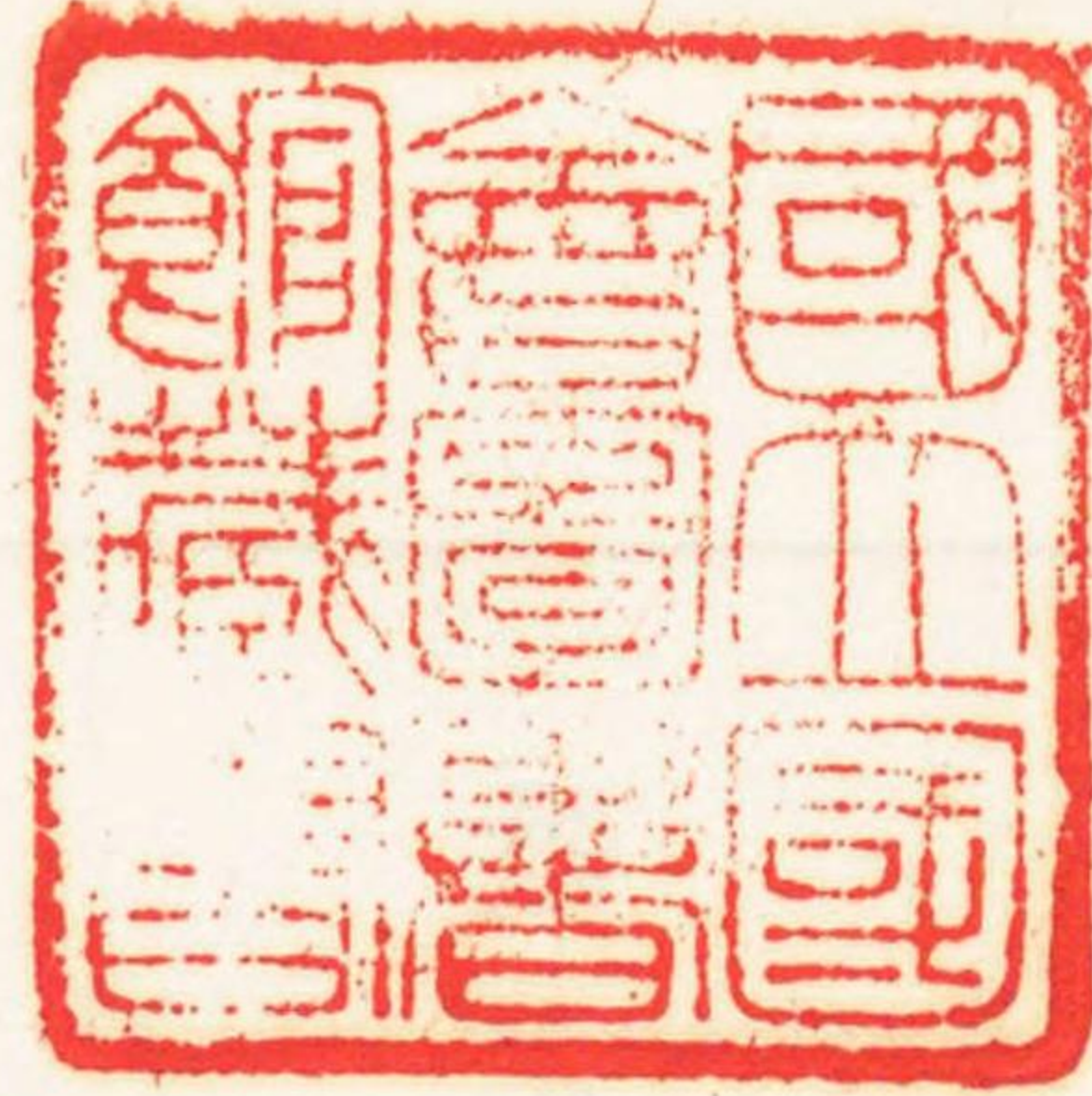
911.168. Sa 266A3

1

目次

昭和十六年

曉の水 (五首)	三
新年賀歌 (二十三首)	五
漁村曙 (十一首)	一三
曉 (五首)	一七
願ひ (五首)	一九
紅梅 (十首)	二二
アララギ隨時 (十七首)	三五



255653

折に觸れつつ (十七首) 三三

春山 (八首) 三九

舞踊 (五首) 四三

海濤 (十四首) 四四

米 (五首) 四九

兄 (五首) 五一

佐渡小吟 (五十二首) 五三

彌彦山 (十七首) 七三

羽前 (三十九首) 七九

雜之歌 (二十一首) 九四

山中漫歌 (三十六首) 一〇二

續山中漫歌 (六十四首) 一一五

秋 (二首) 一三六

アララギ隨時 (八首) 一三九

折にふれて (十四首) 一四三

引馬野 (七首) 一四八

關ヶ原 (二十三首) 一五一

小佛より垂水 (十三首) 一五九

歳晚 (八首) 一六四

童馬山房小歌 (十一首) 一六七

不疑 (五首) 一七一

雜歌抄 (十八首) 一七三

昭和十七年

新年頌 (五首) 一八七
 連峯雲 (五首) 一八九
 つらら (八首) 一九一
 雪やま (八首) 一九四
 大石田 (八首) 一九七
 獨歩 (十一首) 二〇〇
 旅路 (十一首) 二〇四
 笹谷越 (五十四首) 二〇八
 上ノ山小吟 (六十一首) 二三八
 還曆 (七首) 二五〇

五月二十五日 (五首) 二五三
 をりをりの歌 (八首) 二五五
 ほととぎす (十四首) 二五八
 山中偶歌 (五首) 二六三
 挽歌 (八首) 二六五
 山中雑歌 (三十七首) 二六八
 木原 (八首) 二八一
 十四夜月 (八首) 二八四
 折に觸れ (二十首) 二八七
 初秋小吟 (十一首) 二九四
 稔り (五首) 二九八
 午後 (八首) 三〇〇

萩 (五首) 三〇三

蟋蟀 (五首) 三〇五

残暑 (五首) 三〇七

雜歌 (十一首) 三〇九

柘榴 (五首) 三二四

しぐれ (七首) 三二六

北原白秋君挽歌 (五首) 三二九

悼白秋君 (五首) 三三一

隨緣雜歌控 (三十二首) 三三三

後記 三四一

歌集
霜

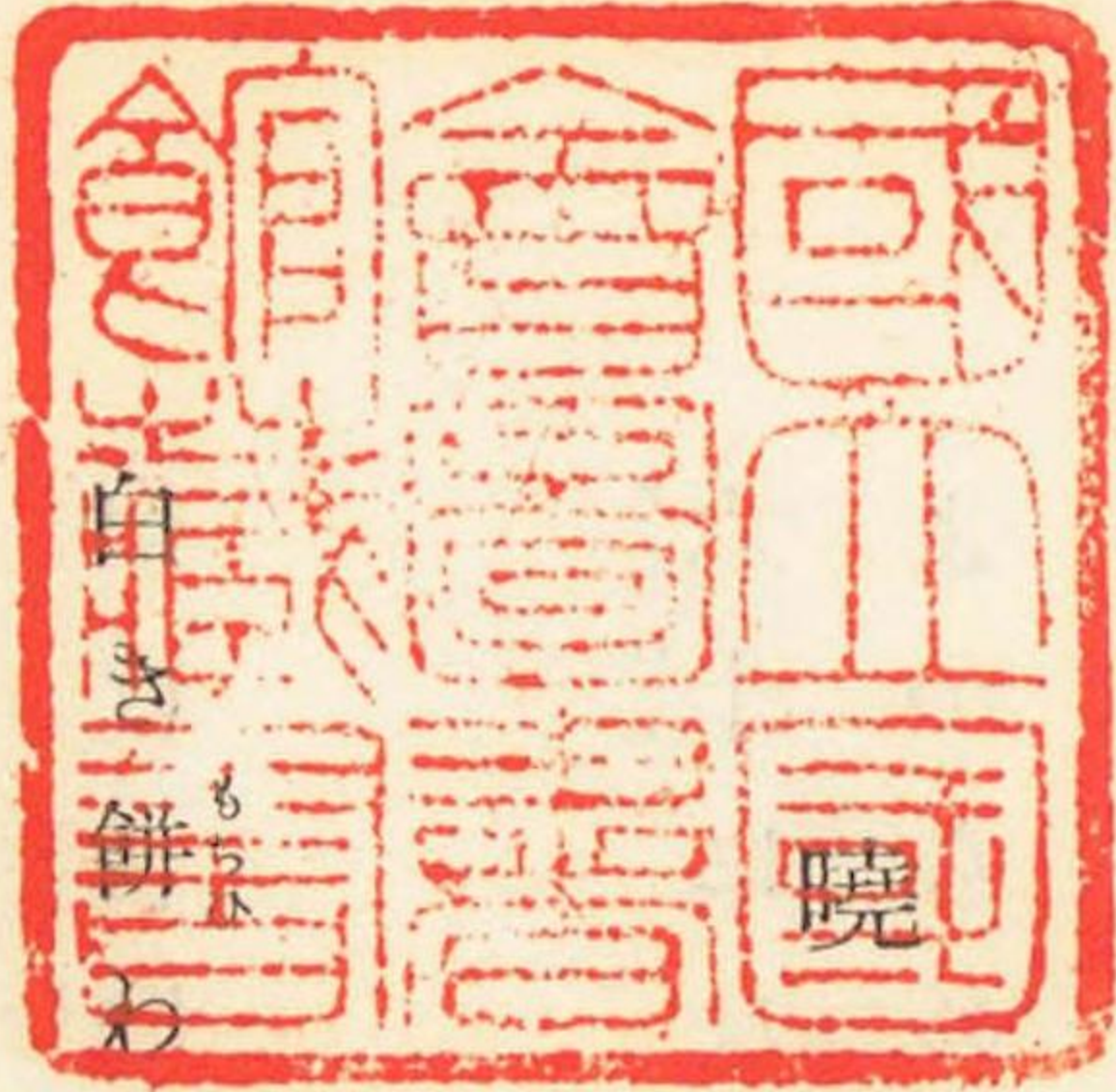
昭和十六年

卷之六

六

ただならぬ世さまといへど物怖うちはらひた
るこの風のおと

おもはむ



の水

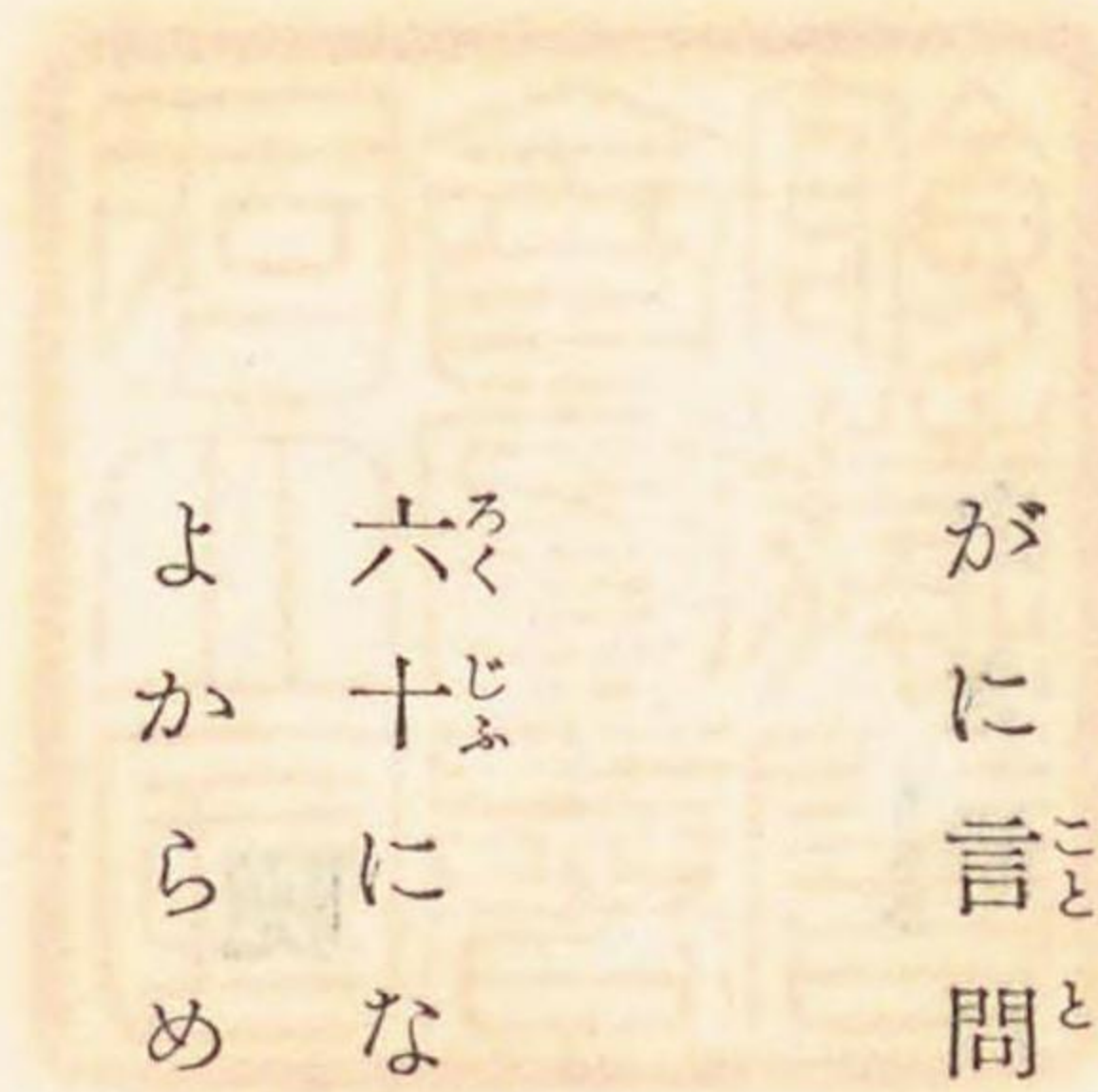
れは呑みこむ愛染も私ならずと今し

開巻十六半

具合報す 満洲の國のさかひに屯してゐるわが甥は眼の

午前より寝込むといはば悲しむならむしかす
かに言問ふなゆめ

六十になりつつおもふ曉の水のごとくに豈き
よからめ



新年賀歌

身みづから六十歳になりぬると眼鏡はづして
そばに置きたり

うしほなみ寄せくる音のおもおもと豊けき濱
に夜は明けむとす

内うちにしてせめ闊あけぐほのこころの絶たえむとき日ひいづる國くに
の曙あけぼのきたる

いささかの暇いとまを持ちて惜おぼしみしが宮本武藏みやもとむさしの
劇げき見て歸かへる

大和田おほわだに茜あかねはさしてひびき來くる潮うしほの浪なみに天あめあ
らたなり

くぐもれる物ものを拂はらひて南みなみなる大門おほとを開ひらけいき
ほひのむた

海うみの幸さいらあふるるばかりよりて來こむはや呼よべわ
が背せはや呼よべ吾妹わがも

しづかなる歩あみつづけて醫師いしらは仁じんのみなも
とを遠退とほそくなゆめ

秋さむく富士川先生みまかりて空洞のまへに
吾等いま立つ

醫の道はつひに覺官的なりと誰いふとなく言
ふを聴かむか

みちのくの藏王の上に立つ歌碑が雪にうもれ
む頃となりつも

六十に吾なりてほろぶる罪ありや古りつるも
のの消ゆかむがごと

幻とその聲がなり悲しきかなや異邦の園に啼
きしアムゼル

目ざめたる寒きあしたぞ新しく感じて吾は二
階をくだる

傳統をありの儘にて見むとして努むるものは
幾人もあり

新なる大きいきほひに入らむ日のこの國民の
眼のかがやきよ

あらた代の富とさかえのしるしとて今こそな
びけ海のあかねは

年のはに心をこめておもふこともの流動の
いや新しく

大きけき年くれゆきて更々にはじめの年の天
あけわたる

紀元二千六百年をことほぎて第一年の年あた
らしも

業房げぼうにこもりて眼まなこ睜ひらることもあな清々さやし年としあ
けわたる

この現うつをさげすむものはおのづから理法ことわりなき
に同じからむぞ

ここにして究きまめむとする學がくをしもささぐべき
時ときいたらざらめや

漁村曙

あかときの男女をとこをみなのこぞりたる網引あびきのこゑは海うみ
の幸呼さいらぶ

天地あめつちの目ざめむとする時にしもはやもおこれ
る海人あまの呼びこゑ

この濱に茜の雲の棚びくを幾代か見つつけふ
新なり

もろともに朝のこゑあぐる汀には今こそ躍れ
大魚小魚

朝日子を真面に受けて入りつ船海の幸あふる
るばかり

あけぼのの色にそまらむ潮浪永久のひびきを
海人常に聞く

あまつ日が海の中よりいでしとき人はいくた
び喜びにけむ

天とほく茜に染まりたなびきて船漕ぎいでむ
きほひおこれる

ひるがへる旗にまたけき幸をこめ呼ばふ潮の
音かぎりなし

漕ぎいづる船に心をとめむとぞ濱の女人ら目
蔭すらしき

断崖のあかくつづきてそばだつを山より來つ
る人見けむかも

曉

ものなべて静かならむを好しとせり心しづま
れこの曉に

海どりの白くひるがへる曉をおのづからなる
人群れむとす

くれなるの光にもあるかあまつ日の海よりた
だにのぼるを見れば

とことはに仕へまつらふ海幸を海人の生をさ
きはひたまへ

鰭の狭物鰭のひろものに至るまで置き足らは
して朝明けむとす

願ひ

北平といひたる頃のおもひでを數多持ちつつ
夜ぞ更けわたる

哈爾濱の市場にありて食料品買はむと誘惑を
感じけるころ

わが甥の勤めはげむは山海關さんかいくわんにいたらぬ前の
驛えきとおぼえむ

寒さきびしき滿洲まんしゅうなれど降りつもる雪は奥羽おくう
の雪に及ばず

いくたびか洋うみをわたらむ願ねがひあり北京ぺいきんの春はるをい
まだも知らず

紅梅

梅の木うめの低木ひききのもともとの青あをき苔冬こけふゆの真まなかに冬
さびをせず

外と面めには霜しもはいたきに赤あかき花はなむらがり咲さきて
梅家うめいけごもる

一尺ひとさかに満みたぬ木きながら百ももあまり香かににほひた
る紅くれなるの梅うめ

花はなびらは上ほ枝えにもあり下し枝えにもありて蕾つぼみのな
ほし五十いそまり

くれなるに染そめたる梅うめもにくからず今いまこそお
もへ白しろ梅うめのはな

花はなびらは上う向むきたるも間ま々まありて下した向むきたる
もにくからなくに

くれなるの梅うめを愛あしむわが歌うたをとめの伴ともは
いかにか讀よまむ

散まりがたになりたる梅うめを眼まぢかくに置まきつつ
居いればわれ獨ひとりよし

くれなるに香^かに立ちきたる梅の花さ夜ふけに
見て心しづまる

うつし世のきびしき時のたまゆらの心^{こころ}の和^なと
紅梅^{こうばい}のはな

アララギ隨時

○二月號

歸還せる看護婦隊の記事ありて朝のうちより
涙いでたり

肉體に自淨作用のあることを吾聽きしより三
十三年経たり

○三月號

一夜明けばかかれとてしも思はめや屋上園に
消のこれる雪

小さなる矩形の鉢に朝よひに樵の幼木は冬木
立なす

五寸にも充たぬ木にして紅梅の蕾が一つはや
も勻へる

○四月號

ソロの木のまだ稚をさなきが五本ごほんたち山の木原きはらをあ
ひ見る如し

ソロの木はイヌシデといひ或る學者がくしやアカシデ
といふソロにて好けむ

楕圓形だえんけいの鉢ひちに竝ならべるソロの木は二月にふがつにほそほ
そとして芽めこもる

○五月號

きさらぎの鮒ふなをもらひぬ腹はらごとに卵たまごをもちて
いかに居ゐけむ

間まを置まきてにぶき鳴動めいどうのつたはるを汝なむぢひとり
に關かはらしむな

飯いひの思おもいづこより來くる晝ひるのあかき夜よるのくらき
にありておもはむ

○六月號

石いし竝なめて賣うり居ゐりしかばとりどりにシナ國シナの
山やまと相見あへるごとし

Kritier 四發長距離爆撃機ことごとく近き運命
を持つ

○七月號

重おも々おもととよみはじめて夜よ明あけたる梅雨つゆ入いり空ぞらに
啼なくほととぎす

涯とほく梅雨うごきしを見つつ居り追及きゆ
かむ曇おもひて

北ぐにの雪消たる庭うかびたり紅のこごりし
芍薬ひとつ

やまかはのかたまりあへる平面圖年老いし人
も目守らむとする

折に觸れつつ

牙えかへるこのゆふまぐれ白髭にマスクをか
けてわれ一人ゆく

午前より地下鐵道の入口にのぼる氣流をしば
しあやしむ

納豆もしばらく食はずしかすがに恣ほしままにてわれ
あるべしや

百貨店の休憩室に來りけり十分間ばかり心は
虚むなし

落の莖五寸あまりに伸びたちて華はなになりたり
今朝けさはあひ見つ

なやましく時にひびけどさもあらばあれいく
る爲しごと事は實おほに大いなり

浮釣木と名づけて愛づる紅花あけはなは外そとのあらきに
當つることなし

小さなる櫓けやきの三もと立ちゐたり大木おほきのごとき
心をもちて

高層の七階にして午後の二時白色のレグホン
が時をつくる

吾がとなりに若き母乳を飲ませをりあまたた
び乳に面すりつく

平野より直にそびゆる遠山の青きにむかふ心
地して立つ

三越の地階に來りいそがしく買ひし納豆を新
聞につつまむ

狂者の残しし飯もかりそめのものとな思ひ
乾飯にせよ

露の藁むらがり立つをよろこびてほほけぬ日
日を來て立ちまもる

みちのくの農に老いつつみまかりし父の稻刈
がおもかげに立つ

春たけて來つつ北空の風をいたみ机のうへに
煤おちきたる

日ねもすを吹きすさびたる風のため小さき青
葉の萌が散りくる

春山

春山をわが來るなべに眼のまへの柞のおち葉
しきりにうごく

うづたかく散りつもりたる落葉山おち葉の下
にこもり水ありて

しづかなるものにもあるか木間このまにて落葉のう
へに照りかへすみづ

小峽せきにし杉の木立こだちの茂しげければ杉の落葉をふみ
つつぞゆく

地つちのうへにくるびかりする石ひとつ朝な夕な
に誰かも見らむ

汝なをおもひしみに見れば春山の槻けの落葉も
おほよそならず

春のみづ砂をながせる跡ありて山の小鳥らむ
つみあそびし

木々の葉のまだ芽ぶかざる上野かみつけの山路をゆけ
ば地つちふるふおと

舞踊

朝鮮の舞のちひさき冠よ健康なる女體の額の
うへに

白き領巾ひるがへりける悲しさをしばし心に
秘めむとぞする

おもほえず彼女ちかづき來りつつ三米突餘ば
かりになれり

崔承喜まなこを閉ぢて歎くときその面わより
光だつはや

みつみつしき女の舞のひとしきりをはりて吾
はうつむきて居る

二月二十五日歌舞伎座

海 濤

ゆふまぐれ陸のはたてにつづきたる曇に觸り
てわたつ白波

とどろきは海の中なる濤にしてゆふぐれむと
する沙に降るあめ

いのちもちてつひに悲しく相せめぐものにし
もあらず海はとどろく

海中は沖といへども暮れかかり巖のめぐりの
濤さわぐ見ゆ

巖むらは黒きながらに見えて居り浪のみだれ
の副へてもとな

やうやくに闇にならむとせしばかりに雨降る
海に波たちさわぐ

安房のくにの燈臺の燈の廻轉をややしばし見
て心足りをり

ゆふぐれになりておもおもと海中なかつに湧くうづ
潮に飛ぶ鳥もなし

酔す章だ魚こなどよく噛みて食ひ終へしころ降りみ
だれくる海のうへの雨

巖なみこゆる濤なみといへども時の間のその鋭きを忘
れかねつも

夜もすがら疾ときあまつ雲うごけるを見ること
もなく眠りてゐたり

おのづから聞こえるは鈍くして海中のよる
明けむとすらし

わたつみに向ひてゐたる乳牛が前脚折りてひ
ざまづく見ゆ

あめつちの出で入る息の音にして真砂のはま
に追むる白波

米

タイ國の砂とおもひて身にぞ沁む宵々に米よ
り砂ひろはしむ

いろ赤き砂もまじりて遙かなる洋の彼方ゆ來
つる米はも

配給を受けたる米を愛しみつつ居りたるなべ
に砂ひろひけり

まじりゐる粉をし見れば細長くわがくにぐに
の粉ごめに似ず

底ごもり安からぬものの傳はるをわれ否定し
て米袋解く 三月二十八日作

兄

ひとり子を嫁がしむとてわが兄は北見の山を
越えつつ行けり

ただひとりの少女はぐくみわが兄は年老いて
よりその子手離す

北見なる野付の町にふた夜寝て兄はひとり子
を今嫁がしむ

おのづから子より離れて年老ゆるその寂しさを
言ふこともなし

眞少女まをとめになれる一人子ひとりこ手ばなしてしづかに老
ゆる兄をおもへり

佐渡小吟

昭和十六年四月二十五日、午前八時半、佐渡丸新潟港を出づ。十
二時兩津著、乗合バスにて午後二時相川に著く。相川の町、千疊
敷、金鑛山などを観て、ふた夜相川にやどりぬ

碧きいろあやしきまでに深くして佐渡相川の
海の潮さる

海草のおふるがなかに流れくるうしほの渦も
見るべかりけり 千疊敷

潮なわのたゆたふ海のふかきいろ巖めぐりて
あをぎりわたる

波の寄る佐渡の濱べのさざれいし色にほひ
てかぎりも知らず

佐渡の濱のくれなるの石かなしきまで吾は手
に持つそのにほへるを

春ふけし佐渡の入り日はわたつみの線ひく雲に
入りてゆきたり

海にいたる小谷がありておち入れば常ふかぶ
かたとどろける浪

いささかのすなどり村に廣場あり寺も共同井も其處にありける

北狄といふ部落ありそのしたの海もとどろく巖のひまに

相川の金鑛山のひびきをも真近に聞きてのほり來りぬ

四月二十六日眞野陵・國分寺趾

御船泊てたまひしといふ戀が浦京おもへばいく重の雲かも

みささぎの苔のふかきにまのあたり遠く旅來つるわれは觸りつ

國分寺あとの松原にひろひたる布目瓦を衣囊
に入れぬ

海ちかき山の中なる金堂にこひねがひけむ島
びとおもほゆ

今の代にまうで來りて薬師瑠璃光如來のくが
ねのひかり

漆の芽あかく萌えつつるたりけり遠くの岡に
道はとほりて

上人のいぶきかかりし木の苗もありけむかも
ともとほり居たり

いつくしき五重の塔の立てる見つ佐渡のここ
ろは淺からなくに

四月二十七日河原田新町を経て小木に向ふ

國府川の流わたれば直ぐ海の碧きひかりが眼
にし入りくも

松山のむかうになりてたかだかと金北山はや
や形かはる

やうやくに灣をめぐりて來しときに佐渡は低
きにひらけつつ見ゆ

あひ對ふ佐渡の山なみの間ひらけ南の方へさ
やるものなし

雪のこる金北山の位置うつり近き岬のうへに
なりたり

對岸むかきしになりたるところ海に入る川などありて
石はらが見ゆ

木炭もくたんを囊ふくろより出すそのときにをとめの車掌も
補助してゐたり

やうやくに木きの芽め大きくなりにつつ佐渡を南
へ旅ゆくわれは

四月二十七日小木港

佐渡にして羽茂川の鮎は愛いしといへど旅をいそ
ぎて一つだに見ず

越後なる彌彦やひこ米山よねやまをふりさけぬ米山よねやまいまだ白
く見ゆるを

城山しろやまに雲雀うんせうさへづり天あまつかけ隈くまなきときに獨ひとり來きたりき

紅葉こうえふの俳諧はいかい彫るりし石いしぶみが立ちたるまへに來て身みをかがむ

松まつかせの音ねする山やまの木この間まにて小こ木ぎの港みなとを見おろすわれは

いにしへに人ひと買かひぶねも泊とまりけむ小こ木ぎのみなとの汀なぎさに立ちつ

すなどりの網あみほせる濱はまのなぎさにて老おいいたる人と短みづかく話はなす

榮さかえけむ小こ木ぎの港みなとのおもかげを小こ路ぢゆきつつ見みむとこそすれ

山寄りの家々の間をわれ來たりたづき静かな
るありさま見えて

佐渡の春ゆかむとぞする晝なかの小木の港は
物音ひそけし

日過ぎなば小木のみなとに赤き石買ひもとめ
たる縁おもはむ

四月二十七日歸路

上人のありがたきいにしへ想ふべき齡になり
てわれは道來る

佐渡の春行かむとしつつかげともに白きを見
れば梨の花さく

女等おんならも田を鋤くなべに現身うつしみにあまつめぐみの
垂りつつつゐたり

消えのこるいただきの雪鉛なまりなすいろにもなり
て佐渡さどの行春ゆくはる

路のべに義民ぎみんの墓が立ちゐたりいつの時代ときよの
義民ぎみんなるべき

四月二十七日黒木御所蹟(泉村下車)

正觀世しょうくわんぜ音菩薩おんぼさつしづまりたまひたるこの御寺みでら
に春ゆふまぐれ 法教山本光寺

すめらぎのこもりたまへるみあとにて椿の花
があまた落ちつも

高山に對ふ宮居のあとどころかなしみふかき
春ゆかむとす

かの山の雪春ごとに解けゆきて青きをみそな
はしたまひたる

山鳩はうらがなしきに啼きをりて二つ啼かざ
るこのゆふまぐれ

としどしにここに山ざくら咲き散りて畏きろ
かもいにしへおもほゆ

洋傘と鞆を持ちて満員のバス素どほるを吾は
見てゐる

辛うじて吾乗せくれし乗合のバスの中にて旅
をぞ思ふ

車掌山本タツさん運轉手近藤治作君

四月二十八日午前九時五十分兩津を出づ

應召にゆく青年らおなじ時にひとつ船にて出
でたたむとす

松毬が松のこずゑより落ちくるを拾ひて持て
り鞆のなかに

彌彦山

ほのぐらき山の朝道ひとりゆく七曲ともいひ
をる道を 四月二十九日

杉山に松はらまじりしげりたる彌彦のやまを
めぐりてのぼる

あはあはと 莓いちごの花の にほひゐて 黒き蜂こそま
つはりにけれ

かたくりの花をもとめむ 吾われならず 山のたをり
ににほへるあはれ

あかときのくらし 森ぬちに啼なきゐたる 山鳩の
こゑ 下したになりたり

かへるでの木の芽めは いまだむらさきに見えつ
つ 春の寒きにやあらむ

むら山に 低山ひくやまいくつ かたまりて 越後のくには
霞みわたれり

せんまいのわたをかむれる 萌立もえだちをひとり見つ
れば 黙もくにしありき

松かせの吹けるところもとほり來し松風ふけ
 ばこころさびしも

秋蟲に似たる音にして聞こゆるを春山にのぼ
 り吾はおもひき

わが對ふ山よりくだる水のおと石間にひびき
 聞こえたるらし

切通と山びとのいふところあり小峽吹きあぐ
 る風はわたりて

のぼりゆくあるところには白き色あやしきさ
 まに雪は消のこる

ながれたる川のみなもとほそほそとなりつつ
 ゆきて吾は見がてぬ

彌彦山上

彌彦いひこの高たかきにをりてこほしめる佐渡さどは曇りの
奥おくになりつも

岩代いわしろの會津あひづの山とおもほゆる雪しろき山やや
横ほりて

春はるふかき越後のくくにの山河やまがはをふりさけ見れば
あらた人びとわれは

羽前

四月二十九日午後二時四十四分新潟發、坂町に乗換へて、羽前の
泉、小國、赤湯にむかふ

わがよはひ六十むそぢになりてあな清さやけ彌彦いひこの山の
うへに汗あせ垂たる 車中一首

浅山あさやまも春の光のとほればかこごるがごとく青あを芽めだちぬる

春の日の空そらにむかひてひと山の落葉松からまつの芽めのもゆるやさしさ

山がはに沿ひてのほれば白雪しらゆきはおもひだしたるごとくに残る

越後えちごより羽前うづぜんに入りて小峽せまなる雪解ゆきのみづのさかまきながる

朝日あさひ嶽だけみづがねいろに雪残り前山さきやまのまの奥おくに見ゆるを

山がひに消けのこる雪は小さくなりて赤土あかつちのへりにも残る

四月三十日、赤湯を立ち上山温泉山城屋に著く。五月一日、上山を立ち山形を経て高湯温泉なる龍山に登る。高橋重男同道せり

ここに於て藏王の山はあら山と常立ちわたる
雲見つつをり

ひさかたの天はれしかば藏王のみ雲はこごり
てゆゆしくおもほゆ

櫻桃の花しらじらと咲き群るる川べをゆけば
母をしぞおもふ

春ふけむ五月一日しら雪は澤のひだりに消え
のこりたる

しろ妙の雪をかかむる遠山がをりをりに見ゆ
木立の間に

うつせみの胸戸ひらくるわがまへに藏王は白
く雁戸ははたら

いきほひて山の奥よりながれたる水際しづか
に雪は消残る

いつしかも笹生ひたしてこの谿の雪解の水の
あつまるあはれ

消のこれる雪は笹生のうへにして春のふかみ
に日ごとに解けむ

雪ふみていゆく春山のしづかさにかへす
雪のうへより

龍山のいただきにありて

藏王よりなだれをなせる山膚やまはだに白斑しろふになりて
雪消えのこる

羽前うづぜんなるあまそそる山いまだかもそとの雪
かげとももの雪

山の峰みねかたみに低くなりゆきて笹谷ささや峠たうげは其處そこ
にあるはや

雁戸がんどよりひだりに低くなりゆきし笹谷ささや峠たうげは愛かな
しきろかも

藏王ざうわうよりひくきひくき雁戸がんどのある色をしばし
戀こほしむ雪のはだらも

湯ゆのごとき道の見えをる山越えてわきいづる
病やみ人びとかよひき

しらじらと川原かはらがありてその岸にわが生あれし
村の杉木すぎこ立たちみゆ

生きものの膚はだをなせる山むらにまだらに雪の
白きかなしさ

斑はたらにし消けのこる雪をさやりなく見つつやう
やくに高きゆ下くだる

山をくだりて若松屋長右衛門方にやどる。五月二日、結城哀草果
來り會ふ

枝ひくき杉はらに消きえのこる雪斯くやすらか
に見ゆるものかも

あまつ日の光全またけきを樂たのしみて照りかへし來
る雪のうへに居り

かく近く聞かむものかも鶯はわれのうしろに
啼きつつあはれ

高原の春のひかりの隈なきに消のこる雪の傍
にわがゐつ

ひと小谿おほひて残る雪踏めばその雪きしむ
音もこそすれ

太陽は五月一日かがやくと冬がれ草伏して雪
消たる原

消えのこる雪のかたへに杉の樹の根方にすわ
る愛しく思ひて

おきなぐさ野にしふふまむころにして藏王の
山の雪はだらなり

春ふけし山中やまなかにしてたちてくる割木わりぎの香かこそ
こよなかりけれ

高原たかへを越えのぼり来て消けのこれる雪のかたへ
に我はたたたすむ

哀草果と林中を行く

しづまりて消のこれる雪に入日さし青杉の葉
の落ちたるが見ゆ

石原の石に苔生ふることもなくあたたかき水
きほひてながる

しづかなる春山はるやま峽かひのかなしさよ杉原すぎはらゆけば杉
の香ぞする

雜之歌

粒粒皆辛苦すなはち一つぶの一つぶの米のな
かのかなしさ

粒りぶ卻りぞけて霞かすみを喰くふといふことを古いにしへの代よに誇ほこ
りしもあり

ひとりごの爲めに朝よひの事計り天鹽の國に
兄すこやけし 兄富太郎二首

新あたしき夫婦ふうふを旅にたたしめて兄あにら夫婦ふうふは雪あ
る村にかへる

ユーゴウ國のクーターに驚くは誰ももち居
る懷疑よりする

わが机をもむくむくと動かして日に幾たびか
トラツクとほる

北平ペキンより求め來し漢魏叢書など日向ひなたに竝なめて
陽ひはうつりける

この園そのにひかり移りて白牡丹しろはたんくづるるとき
音おとをこそおもへ

いとまなきわれにありしか日向ひなたには五年いっごぶり
に書かみをならべぬ

太刀山峰右衛門(老本彌次郎) 四月三日歿、行年六十五

四十歳以後もますます強かりし二十一代横綱
みまかる

ウンガルの首相テレキイ氏逝去して自殺な
らむといふ記事があり

十日^とまりまへにいでたる羊^し齒^だのもえ開^{ひら}かむと
してそよぎてやまず

庭くまの羊^し齒^だの新^{にい}もえ日もすがら此^こ處^こになよ
なよとしたる安^{やす}けさ

羊^し齒^だの芽^えの上^{うへ}にむかひて伸びたるを垂^す直^{ちよく}にわ
れ見^みおろしてゐる

ブルガリアのソ^ソフ^フィ^ィアに櫻^{さくら}が咲^さくといふその
櫻^{さくら}ばな一^{ひと}日^ひおもへり

日もすがら建築の音^ねひびき來^きてわれの机^{つくえ}もと
きどきうごく

春山の青みだついろあひ見つつうつつもいめ
もこめておもほゆ
五月十八日大阪

近江路はいまだ寒しとおもほゆる伊吹のうへ
に線なす雲あり
五月十九日大阪を立つ

あひつぎて見がほしき山春ふけし青きが上の
伊吹の山は

255658

姫あやめの愛しき花をうごかして地のうへ低
く風ふきわたる

われつひに老いたりとおもふことありて幾度
か疊のうへにはらばふ

山中漫歌

朴ほの木のの二尺にばかりになりしものみづみづし
くも此處こに立ちけり

この家の木立こに來鳴く山鳩やまもうつつなる世の
ものにしありき

山なかに鳴く鶯うのもろごゑを嫉ねたまむ時の吾われに
ありやなし

過去くわになりし左千夫さち翁おきなの小説せつを讀みてしばら
く泣きつつゐたり

朝あはやく天あまがけりゆく音響おんきやうの聞こゆるあひだ
吾われあふぎけり

かなかなは波動をなして鳴き來りそのひと時はわれ快し

峽空の光のなごり消えなくに啼くほととぎす
峽に聞こゆる

山こもりわれは居れどもむらぎもの心よわし
と豈いはめやも

ひぐらしは日毎にふえてわがそばの百日紅の
木の膚にも二つ

山なみにひびきて鳴きし晩蟬は暗やみとなり
皆ねむるらむ

草の上の蜘蛛のいのつゆ朝日子が染めてしば
しのかがよふものを

朝けより雲なくなればいたきまで山の光は額
にし染む

國力われはおもひて寝たりしが夢を幾つも見
つつ居りにき

實生より五年あまりになりつらむ杉を一本こ
こに移しつ

こほろぎのいまだ鳴かざる山中の月のおぼろ
をしばし戀しむ

山鳩がひとつ來鳴きてわがいへの松木立より
なかなか去らず

あかつきの山鳩のこゑ聞くときは心はなごむ
哀れならねど

くぐみたるこゑに啼きづる山鳩を心に持ちて
 静しづけくもあるか

この山にみなぎりて降る雨のおと一つの鳥の
 こゑも交まじへぬ 七月十二日

こほろぎの子の生なまれしが百ひゃくあまり廊下に居り
 て土つちにこもらず 七月十四日

岩元禎先生七月十四日午前零時逝去

あぢさゐの紺のにほひの深きころ君みまかり
 てかなしくもあるか

かいほそりし手を枕にしわがまへに杜と少せう陵りやうの
 こといひ給ひたる

山にては女ささやく聲さへも聞こえて來るし
づかさを有つ 七月十七日

書のうへに徹ふきながら山中は霧にくらみぬ
きのふも今日も 七月十八日

山をおほひ雨のするどく降るときは鶯らいづ
こに隠るひ居らむ 七月二十日

白き霧天よりつづき果てしかば杉の秀立が前
にあるのみ

ひといろにうづみつくしし白雲は天地成れる
元始のごとし

かなかなの群れ鳴く時はひとしきり雨晴れ來
り白雲の疾き

舟上しゅうじやうに孤高こかうたのしむシナ國しなこくのいにしへびとの
事にしあらず

數千の蟬鳴くこゑも驚かずなりにしものを朝
宵に聞く

山中やまなかに降る雨のおと或時あるときはこの寂しさの堪へ
がてなくに

七月二十二日 颱風豪雨

みなぎりて雨ふるときにきのふより昆蟲こんちゆうは壁かべ
につきしままなる

壁かべの上うへにしづまり居りし甲蟲かふちゆうがいまだ動かす
山あらしの雨

川のおと夜もすがらするを聴きをればあらし
吹きゆくごとくにも聞こゆ
七月二十三日

白雲の立ちみだる奥の澄空や羽のかたちのし
づかなる雲

米を縁がはに干せば米の蟲いくつも出でて逃
ぐるを見てゐる

續山中漫歌

さだめなき夕まぐれとてこの山の高天の戸に
虹たちにけり
八月一日半天に夕虹立つ

黄金いろの空あらはるとおもひしにその真中
にて虹たちわたる

峡空のみだれて來るなかにしてこがねの雲に
たてる虹はや

山峽を朝な夕なに見しかどもこの美しさ見し
ことぞなき

高空に虹のたつこそあはれなれあまつ日山に
没しけるかな

たまはりし食物をおしいただきぬ朝のかれひ
にゆふの餉に 八月五日

みんなんと鳴く蟬をはじめて今日聞けり彼等
といへど晴をたのしむ 八月六日陰曆閏六月十四日晴る

この山の杉木立よりひくくして月あかあかと
かがやきにけり

まどかなる月にならむとする時の夜雲は晴れ
てくぐもりぞ無き

あきらけき月にむかひて咲く花をあはれなる
かなや心に持たむ 八月七日満月

八月三日丸山東一氏逝去す

公おほやけにささげむとするためのみになみなみなら
ず君は居りにし 八月十日

ほのぼのと空そらにほひし合あ歡むの花はなのおとろふ
る頃いまだ山を下くだらず

夏山なつやまはさ霧きりにくらみほとほとに女をみなおそるる吾わが
身に沁しみみわたる 八月十一日

豪雨おほあめの雷らいをまじへて降る聞けば傷いたまむとする
國くに土にをしおもふ 八月十三日

おぼろなる心うごきは安やすからず米まねに係かかはりつ
昨日きのふも今日けふも

山中やまなかの空そらは凡おほよそのものならず黄昏くわんこんにみづからの
足跡あしうらを揉もむかな

子規忌歌會のために

つつましきその直観を爲しましき正岡子規の
俳句も歌も 八月十四日夜

山なかに来て氣づきつつ居り次男じなんもこゑがは
りしてわれに優やさしも 八月十六日

夏ごろより次男もこゑがはりそめて漢文讀本
讀むこゑ聞こゆ

右がはの偏癱へんたんになりこやりたる君がかひなを
取りてなげくも 八月十七日渡邊草童を訪ふ

しまひ置きて徴かびむとぞする紙幣しへいをば山の日ひ
向たに竝ならべつつ居り 八月十八日

日をつぎて雨の降りたる山峽やまがひの晴れむか朝け
山鳩啼きつ 八月十九日

八月十五日井上通泰先生逝去せらる、行年七十六歳

新しくこまやかなりし考證の學をのこして去い
にし君はも 八月二十日

八月十六日長興又郎先生逝去せらる、行年六十四

東漸の學なりし Pathologia の綜合ひとたび爲し
たまひけり

われひとりしづまる窓にすれずれに山の小鳥
の羽ばたく音す 八月二十一日

すでにして曇のふかき山峽は朝はまだきの山
鳩のこゑ 八月二十二日

山越ゆる雨はれしかば日もすがらけふもにほ
ひし萩が花ちる

山中にくもり深けば惜しみつつ 珈琲を煮しこ
の私事よ

いでそめしうすくれなるの薄すすきの穂野ほの分わきだつお
とはやも聞こゆる

山やま中なかにこもれるわれに樂たのしめと最も上がみ川がはの鮎あし十とそ
おくりこし 八月二十三日林壽子より

峽の門とがあかがねいろになりしとき空そらのなか
ばを雲はれわたる

山やま毛け櫛かみの樹はふとぶとと枝持ちながらこの山やま
中なかに年とし経かりて居り 八月二十四日小塚山乙女峠

むら山の青きが守まもるごとくにてかく高きとこ
ろにみづうみあるか

合あ歡はら木きのはな終はつりとなりてやはらかくそよげる
葉はのみここより見れば 八月二十五日

こもりゐる吾にも食へよとたまものと熱海の
うみの生き足りし魚 坂夫人より

夜もすがら野分のおとすひとつだに馬追來鳴
くことなかりしに 八月二十五日夜

山のうへの石にとまれる蜻蛉みゆ飛びゆきて
また石に歸り來 八月二十六日茂太宗吉と明星嶽登山

石のうへに蜂ひとつ来てとまりけり蜻蛉の如
きしづけさなしも

われのある部屋への窓より直ぐつづく低空にし
て鴉の羽音はねおと 八月二十七日細雨

杉の樹の膚はだをちかく見つつ居り寂かになりし
光ひかりあたる

山なかのまだ暮れきらぬ小草より白露のぼる
このしづかさよ 八月二十八日

ゆふぐれの浅茅にひかる白露のたまを或る時
は螢かとおもふ

太杉の枝はらはしめ枝すきし杉をしげしげと
見居るわれかも 八月三十日午後雨

米の蟲の白米侵すありさまを見たりけるいた
く驚きながら 八月三十日雨

のこり居るひぐらしのこゑ下谿にとほく聞こ
えて日は暮れむとす 九月四日

やはらかき秋の光のしみ入りて青原に蟻蛸羽
ひろげ飛ぶ

暗谷くらやに姫沙羅ひめしゃらの木は古ふるりをりてをりをり雲の
くんだり來るなり
九月五日陰曆七月十四日月清朗

山かせの音のゆくへは下谷したやの杉生すぎふを越えてな
ほし遠きか

海のおとこの山がひに聞こえしをかなしく吾
はひと夜おもひき

雨ふりし夏すぎゆきてこよひもや高萱たかがやひかる
まどかなる月

馬追はこの月の夜に鳴きにけり時過ときすぎたりと
おもひ居りしに

一いち椀わんの味噌汁みそじゆの恩干おんぼし蕨わらびいれてたぎてる汁じゆを
し飲めば
九月六日陰曆七月十五日満月

ものきびしき世相よさまにありてはしけやし胡瓜きうり嚙か
む音ねわが身よりする

彩雲あやぐもは月のほとりにいざよひてしばらくにし
て消けたるあはれさ

杉木すぎこ立たちの間まをさしくる月かげは岡おかの浅茅あさぢを照あ
らしてゐたり

あやしまむものならなくに蟋蟀こほろぎは湧くごとし
げし山の月夜つきよに

しげみには青あをき葡萄ぶどうの房ぶどうも見てそこはかとな
く山を遊ぶも 九月八日

激たぎちある谿たににむかひておのづから傾かたむき生おふる
木原きはらも好よしも 九月九日小塚山

白膠木の實うすくれなるになりにけり秋ふけ
にして鹽ふくらむぞ

けふひと日強き雨ふり爲むすべのなきがまに
まにまどろむ吾は 九月十一日二百二十日豪雨

ゆふぐれて山のはざまに鳴る雷を雨のをはら
む徴とこそ聞け

しづかなる心をもちて山くだる雨おほかりし
ことをおもひて 九月十二日下山

この山に吾はこもりて健けくありたることを
おもはざらめや

さ庭なる小草をおきて行かむとすわが下駄の
踏みしひくき小草を

秋

哀草果われにくれけむ納豆も七日たもたずか
たまりぬるを

山形のあがた新米のかしぎ飯納豆かけて食は
む日もがも

アララギ隨時

○八月號

霧がながる
藪草の群れたる花もあはれにて朝な夕なにさ

ほがらかに來啼く鶯このゆふべたはむ戯れのごと聞
こえつつあり

山なかにわが持て來つる二斗餘の米を愛をし
みて疊にひろぐ

○九月號

アララギの魂たましひをしてつつましく諸もろともにせむ
時は來むかふ

子規左千夫そのきびしかりしみ命いのちを今に傳つたへ
ておこなはむとす

○十月號

ものなべて乏しといひて粘ある山草くへばよ
ろこびまさる

小つぶなる金米糖を見いで來てをしみつ居
る女中等のこゑ

納豆を食はずなりしより日數經てその味ひも
おもひいださず

折にふれて

ひむがしゆ北へわたりて開きたる天ことごと
く黄なるゆふぐれ 九月十九日

川のべにひとかたまりの淺茅むらそよぎなが
らに秋さびむとす 十一月七日五首

かたはらに自轉車置ける少年が大川のみづに
對ひつつ居る

川のべの道の白きにさす光冬の來むかふ光と
ぞおもふ

大川のみづに及ぶ小公園につみたる砂はなべ
てみだれつ

榎の樹が淺草寺の境内にあるを見ながら歩み
てゐたり

ひとところ榎の落葉はうづたかくつもりてゐ
たり秋の日にけに
十一月八日

家のあひの狭き空地にしげりけるおどろの色
も秋さびゐたり

ひひらぎの木に直立すたの萌もえみゆるけふの秋あき日に
われいでて來ぬ

いく段きたの雲は空そら合あひにたなびけり寒さむくなるらむ
とおもほえなくに

圖書館の出納をする少年がきびきびとしてゐ
たるうれしさ 十一月九日

一谷ひとたにを越えて彼方かなたにありといふははその落葉
見にゆかむとす 十一月十一日

街が上じやうにゆきあふうからことごとく神のうから
とおもふたまゆら

胸のへに徽章しるしをつけていそいそとをさなきを
背に負ひつつぞ來る

引馬野

萬葉の阿禮埼は現在寶飯郡御津町大字下佐脇新田に當る。右、御津町御馬、今泉忠男氏の考證によれり。十一月二十一日今泉氏は堀内氏及び予を導きて萬葉の古跡に及ぶ

わきいづる水のゆたけき海のべにいにしへの
代の行幸おもほゆ

萬葉のいにしへの代の阿禮の埼考證し來れば
雨ふりしきる

いにしへの引馬の野べをゆきゆきて萩の過ぎ
たることをしおもふ

引馬野にほひし萩をみとめむと宮路山べを
のぼりつつつをり

宮路山つひにのぼりてたちこむる狭霧の奥の
海をしぞおもふ

山くだり三人いそげど國府町の國分寺址に日
は暮れにけり

せまり來し時をしみて家こぞるあつき情を
かたじけなみぬ

關ヶ原

いにしへの和躰が原をさだめむと友の言もち
道いそぎける

ひとりなる心さびしく立ちゐたりもみちの赤
き不破の關の址

不破の關址とし思へばうらがなし朝な夕なにもみぢ散らむに

八百の銃卒攻撃をはじめたる福島隊をここに
ておもふ

刈りをへし稲田にくだり晝の飯食ひつつ目守
る松尾山ひくし

脇坂の陣のあと見ていきどほり山中村にたど
りつきたり

萬止むを得ずといふとも裏切は審判のまへに
まぬがるべからぬ

汗しとどながれてわれは立ちて居り大谷吉繼
戦死のところ

天満山てんまんざんのかげになりつつもみぢばのすがれし
谿たににしばしば迷ふ

つゆじもの未だ乾ぬ道みちをゆきゆくゆきに負けし戦たたかひ
つねにおもへる

藤子川ふじがはの谿たにみづわたりなづむころ天満山てんまんざんのか
げになり居り

竹村たけむらのなかをきたれる息休いきやすめわれひとりにて
いぐさ悲しむ

まはりみち幾度いくたびもして小西隊宇喜多隊等の跡あと
を歩みつ

天地あめつちもくらむばかりと記しるしあるたたかひのあ
と尊たふとくもあるか

関とのこゑあがる最中もなかに立ちながら指ゆびを嚙かみる
し家康おもほゆ

激戦もろてのきはまりぬれば諸手打込うらこみの白兵戦はくへいせんに始し
終じゆうせられき

小池村の道のほとりに島津隊布陣ふぢんのあとが直
ぐ見つかかりぬ

中山道北國街道きたくにかいだう扼やくすとも守勢の陣といふべか
らずや

のぼり來し石田の陣のあとどころ笹尾ささおの山やまに
汗冷えむとす

黒田勢特殊部隊のすすみたる相川あひがはをしもここ
に見おろす

冬に入るたひらに立ちて今しがたのぼれる山
をかなしむわれは

勝さだまりし最後の陣のあとどころ稻田のう
へに西日さしたり

六十になりたるわれは午後四時の汽車に乗ら
むと汗垂りいそぐ

小佛より垂水

十一月二十七日、浅川驛に汽車を降り、小佛の峠路をゆく。山口
茂吉君同道せり

山椒の實を摘みとりて秋山をおもひいでむと
語りあひける

水の瀬にそひつつのぼりゆくときにははその
木原もみぢうつろふ

一國のさかひを越えてうつせみは關を過ぎき
とふあとどころこれ

うめもどきからくれなるにもみでるを小佛道
に見つつし行けり

うつくしく柿落葉せるかたはらに茶の花咲け
りひとのたづきに

胡頹子の實のくれなる深けしこの峽は夜空は
晴れて霜ふるらむか

のぼりゆく山のはだへにこごるごとと檜原は黝
し秋はさむきに

小佛こほとけのたうげに居ればふりさくる狭間はざまはなが
し北にむかひて

小佛こほとけにのぼり來りてむら山の奥おくがなる山の雲
愛あしみける

いただきに出でたる水はすぢなして谷の底そこひ
にながるるあはれ

木下こしたやみふかぶかとせるを通とほり來て光ひかりあかし
山をめぐりつらむか

木下こした闇やみわがとほり來し木原山きはらやまその全またけきがあ
らはになりつ

しげ山のくらき木原きはらのみちを來て水のゆたけ
きところに出でぬ

歳
晩

黄いろなる公孫樹落葉のさだまるを朝な夕な
に見とも飽かめや

こがらしの吹きとほるおと庭隈にすゑたる甕
のへにも聞こゆる

としどしに咲き愛しみしつはぶきはいまだふ
ふまぬ時雨は降りて

をみなごの千社祈願としるしたる札かかりけ
りまづしきその文字

うつつなる大きなからひするどきの渦なすな
べに年くれむとす

ひとり居ゐのひそむ願ねがひにありしかど衢ちまたよこざり
わが心もゆ

ものに迫らむ吾ならなくに冬夜ふゆのよの暗くらきに向き
てしばし眼めをあく

書ふみの上にも書ふみと書ふみとのあひだにも目に見えぬ
塵ちり來きたりてつもある

童馬山房小歌

みちのくの秋あき田たあがたより送りこし榎くわりん櫛りんなな
つをわれは愛をしむも

黄色きいろなる榎くわりん櫛りん枕まくらべにひとつ置くわれの眠ねらむ
その枕まくらべに

健忘けんぼうになりてことごとくに失うせゆきし戀こほしき心
ときのまよみがへる

小さなる鐵工場てつこうじやうに火ひ花はなちる往還わうくわんよりわれ入り
て來きたるに

鐵砧かなしきのまへにこごめる樂たのしけき少年工せうねんこうの面おもほ
てりけり

脊柱せきちゆうを伸ばし得るかぎり伸ばしたり海うみのかな
たのこと聞きながら

香かうのもの食はむときさへにただならず國くにのお歴
歴れき感冒かんぼうを爲すな

厚あつら葉はのなかにこもりて萬年おんねん青あおの實紅あかきころ
ほひ時とき雨あめふりけり

健康の遺傳すること見つつくる路傍の石榴く
れなるふけて

しぐれ降るわが庭隈にあをあと冬越えゆか
む姫あやめぐさ

たわやめのたぎつ涙の清けれどあかき光に人
に知らゆな

不疑

冬ふかむ夜に醒めゐて丸山東一君のことおも
ひ出されてならず

苧草の燃ゆるけむりが秋河の水にむかひてな
びきつつあり

わが心たひらになりて快こころよし落葉おちばをしたる橡とらの
樹きみれば

秋山あきやまにむら鳥の啼くゆふまぐれいまだねぐら時ときにゆ
かざるまへよ

辛うじて忠實ちゆうじつなりしわが部屋に年くれむとし
ておびただしき塵ちり

雑歌抄

長塚節忌歌會(二月二十三日)

きさらぎのすゑにもなりて吹く風の強きひと一日ひ
の歌會に来る

T氏新婚賀(二月二十四日)

ゆたかなる光を浴みて芽だらくる松の常みど
り君にたぐへむ

醫事新報二十周年賀(二月二十五日)

くすりしの^{たふと}尊き業をひたぶるに言あげしつる
君を讚へむ

森類・安宅美保子新婚賀(三月二十九日)

なべて世の^{ほきごと}祝事なれどうれしさに涙のいでむ
ばかりになりぬ

赤彦忌歌會(三月三十日)

木々の芽のやうやくにして見ゆるころ嵐ふき
過ぎて厚し曇くもりは

沼田哲子刀自を訪ふ(四月七日)

さくら花咲きさかりたるけふ一日ひとひいにしへ人
をしぬぶ樂しさ 伊藤並根翁

牛飼と牛飼どちらの交りは歌をつくりて樂しか
りけめ 伊藤並根・伊藤左千夫

武藤長藏先生還曆賀(六月九日)

君の「學」を愛でつつ遠きおもひでよ今日あり
のままに君ぞ尊たふとき

豊田八十代翁を偲びて

山川を踏みさくみつつ新あたしく萬葉を釋きあか
したまひき

石田昇氏一周忌追悼（六月十日）

鳴瀧をともに訪ひたることさへもおぼろにな
りて君ぞ悲しき

子規先生四十回忌歌會（九月二十一日）

わがどちの尊たふとぶ竹の里人はやまひの牀とに若く
いましき

能面圖録に題す

雁かりなこきわおもてたる
小面にあひむかひたる秋の夜のふけゆく頃に

徳富蘇峰先生

うつつなる君を聴かむと五千人の中にはひり
て額ひたひに汗いづ

竹葉亭にて

高ひかるひじりのみよにためらはす鰻をめ
てこころいさまむ

贈られし薔薇

かたまりて百あまりある薔薇より香にたらく
るをあやしと思はず

心古りしものとおもひて過ぎこしを今夜こそ
見め花のうばらを

橋健行君墓銘

亡き友の墓碑銘かくと夜ふけてあぶら汗いづ
わが額より

